

「伝わる伝道」プロジェクトの意図するもの

満井秀城
(みつい しゅうじょう)

2年余りにわたる新型コロナウイルス感染症は、各方面に多大な悪影響を与えた。わが教団も例外ではなく、多人数の参集Ⅱクラスターを連想され、法要や法座が大きな打撃や制約を受け、伝道教団の生命線に関わる大事態となった。感染症自体はいずれ終息を迎えるのだろうが、その時に完全に元に戻る保証はなく、実は感染症流行以前から、法座活動には危機が叫ばれていた。現在でも、地道に法座活動を継承してくださっている寺院の努力は特筆すべきだが、社会構造の激変に伴う人口流動化現象の中で、若い世代の都会への流出による地方の高齢化と疲弊は、もはや避けられない事態となっている。一方、若者世代においても、多忙な生活や、人口は多くても孤独感や生きづらさの中にあつて、彼らこそ、いま最もみ教えが必要なはずである。若い世代にみ教えが伝わるには、新しい手段が不可欠であり急務である。彼らにダイレクトにみ教えを伝えるには、彼らが気軽にアクセスするSNSツールが適切であろう。そのため、本願寺派では、約1年10カ月前からインスタグラムを開設した。本願寺の美しい写真をアップすることで、本願寺に興味と関心を持つてもらい、同時に伝道教団として、短い法語も配信し、さらにこの半年には、1分間の法話動画も配信した。若者には長時間の時間拘束は敬遠され、短時間での勝負が迫られる。伝えようとする内容がいくら豊富で上質でも、「わからない」と判断されれば直ちに別の画面に移られ、「伝わらない」事態に陥る。

これからの布教活動を考えて行く上でも、右のような事情を踏まえ、「伝えるべき」内容が、いかにすれば「伝わる」のか。どういうスタイルが相応しいのか。スピード感をもって、しかも着実に遂行して行きたい。

(浄土真宗本願寺派総合研究所副所長(所長職務代行)・「伝わる伝道の研究と実践プロジェクトチーム」統括責任者)